

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 31 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520637

研究課題名(和文) 独習書の分析を通じた英語学習法の変遷に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Historical Transition of English Language Learning Methodologies through the Analysis of Self-Taught Books

研究代表者

馬本 勉 (Umamoto, Tsutomu)

県立広島大学・生命環境学部・教授

研究者番号：40213483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：明治期の日本で英語教科書として用いられた英語の原書(文典、綴字書、読本、万国史など)を学ぶ助けとして、「独案内」「直訳」「講義」などの独習書が多数出版された。明治期前半の「独案内」「直訳」では、英文の訳が「直訳風」であるのに対し、「講義」が出版される後半に入ると、こなれた訳文への変化が見られる。英文を行きつ戻りつ訳す際、2度にわたって訳語を当てはめる語(漢文訓読法の「再読文字」に相当)の扱いが変化していることが原因の一つである。本研究では、こうした訳読法変遷の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In the Meiji era, grammar and spelling books, and readers including world history books were imported and used as English textbooks in Japan. At the same time, a large number of self-taught books with the titles of "Self-Taught," "Literal Translation," and "Lecture" were published to help the learners. Through the analysis of these self-taught books, the following results have been obtained:

- (1) The translated sentences in the self-taught books were gradually changed into more natural Japanese.
- (2) In the first half of the Meiji era, certain words, such as relative pronouns, were translated twice in the Self-Taught and Literal Translation books. On the other hand, in the latter half of the Meiji era, the twice-translated words were decreased in the Lecture books.

研究分野：英語教育史

キーワード：英語独習書 直訳 独案内 講義 訳読

1. 研究開始当初の背景

明治期の英語教科書として用いられた舶来英語読本や綴字書用に、「独案内」と呼ばれる独習書が日本で多数出版されたことが知られている。独案内は次のような記述を特徴とし、発音や語彙学習、訳読のための手引書として用いられたものと思われる。

イット	イズ	エ	ドッグ
It	is	a	dog.
其レハ	有ル		犬デ
一	三		二

森修一(1886).『正則ニューナショナル第一リーダー独案内』p.1

この文では、冠詞 a を除く語に振られた数字の順に各語の訳語を並べると、「其レハ 犬デ 有ル」という訳文ができあがる仕組みになっている。

明治10年代後半から明治後期に至るまで、ウェブスター綴字書や、ウィルソン、ユニオン、スウィントン、ニュー・ナショナル、ロングマンなどの英語読本用「独案内」(現代の「教科書ガイド」に相当)が多数出版された。国立国会図書館をはじめ、各地の大学図書館等に保管されているものも多いが、英学史・英語教育史の分野における独案内の研究は十分であるとは言えない。

漢文の訓読を思わせる記述の「独案内」は、それを書き下した「直訳」と呼ばれる書物とともに多数出版された。しかしそれらは、英語学習を妨げるものとして明治30年ごろから批判的とされてきた。一方、明治40年代には「講義」(独案内よりも解説の詳しい独習書)の使用によって効果を上げようとする試みも行われた。独習書による自習を課して授業時の説明を短縮し、代わりに練習に時間を割くというものである。現代の「和訳先渡し」を髣髴とさせる実践が、明治期に行われていたのである。

独習書の使用には賛否両論あるが、明治期以降の英語学習者に広く用いられ、日本人の英語学習に大きな影響を与えた書物であることは間違いないであろう。英文の理解を助けるために今なお行われている訳読の歴史を考察する上で、「独案内」や「直訳」と呼ばれる書物は極めて重要な資料である。独習書の全体像と史的変遷を解明できれば、現代の英語参考書へ連なる「訳読変遷史」が描き出され、今日の英語学習・指導法の成立過程の一端が明らかにされるであろう。

2. 研究の目的

本研究は、明治期に数多く出版された「独案内」を中心とする英語独習書の分析を通じて、英語学習法の変遷を明らかにし、今日の英語学習・指導法が成立する背景を解明することを目的とする。

具体的には、明治期に日本で出版された英語独習書の特徴、および記述内容からみた訳読法の変遷を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 明治期の独習書を収集する。収集対象は、明治期に英語教科書として使用された舶来(および翻刻)の英文典(ピネオ、カッケンボス、スウィントン)、万国史(パーレー、スウィントン)、綴字書(ウェブスター)、読本(ウィルソン、ユニオン、ナショナル、ロングマン、スウィントン)のための独習書(単行本)とする。国立国会図書館「近代デジタル・ライブラリー」等の画像情報も同時に収集する。

(2) 出版情報を記述した「英語独習書データベース」を作成する。「近代デジタル・ライブラリー」には多くの独習書の画像が公開されているが、異なる版の情報は十分提供されていない。本研究では版の異なるものを積極的に収集し、データベースに反映させる。

(3) データベースに登録された独習書を記述内容によって類型化し、明治期における類型別の出版状況を明らかにする。

(4) 収集した独習書に見られる訳読法の変遷に注目し、具体的な訳し方の変化を分析する。

4. 研究成果

(1) 収集した独習書(実際の独習書ならびに画像データ)約700点をデータベース化した。

(2) 記述内容による類型化を進め、次の4分類にまとめた。

①独案内

英文の原文を掲載し、各単語に「発音カナ表記」「訳語」「訳順を示す番号」が付されたもの。訳文や注記を施したのものもある。

②直訳

本文の英語そのものを掲載することなく、独案内で示された訳順に沿って訳文を記した、いわゆる「訳本」。訳文中、部分的に原文の英単語を挿入したり、発音カナ表記をルビのように記したのものもある。

③講義

原文をまとめたパッセージ毎に掲載し、対応する訳文と、その英文中の語句に解説を施したもの。現代の英文解釈参考書の記述内容に近い。

④その他

発音カナ表記のみを記した「音読」「かなつき」と呼ばれる書物や、「字書」と呼ばれる単語集など。

(3) 類型毎の点数は、登録分から重複したもの

のを除外し、①独案内 300 点、②直訳 200 点、③講義 49 点、④その他 34 点、計 583 点となった。次のグラフは、出版年による状況を表したものである。

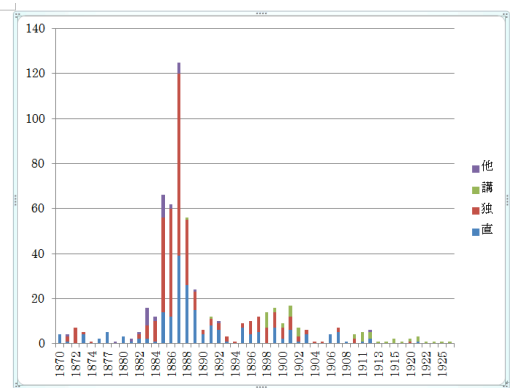


図 1 英語独習書発行点数の推移

記述内容と出版年の分析から見てくる独習書の特徴は、次の通りである。

①出版点数は明治 20 年にピークを迎え、明治 18 年から 21 年までの 4 年間の点数が約半数を占める。欧化政策による英語熱の高まりと、中学校令 (明治 19 年) による尋常中学校設置制限で独学を余儀なくされた者が増加した影響もあろう。この時期の独習書はその後版を重ね、大正期まで出版されたものもある。

②原書のページ数が少ないものは「独案内」、多いものは「直訳」が出版される傾向にある。すべての章が訳出されず、省略された「直訳」もある。また、分冊で発行された「独案内」もある。

③「独案内」「直訳」とも著者 (訳者) によって記載内容や形式に特徴が見られる。

④全く同じ内容・紙面でありながら、著者名や出版者名のみ異なる「海賊版」らしきものが存在する。

⑤明治中後期には「講義」と呼ばれる独習書が現れる。英文の各単語に訳順番号を付す「独案内方式」や、「直訳風」の訳文が姿を消し、「講義」の訳文はこなれた日本語となっている。

独案内、直訳、講義の特徴は次のようにまとめることができる。

表 1 記述内容の比較

類型	独案内	直訳	講義
英語原文	○	×	○
発音	カナ表記	一部にカナ表記ルビ	カナ表記 + α
単語訳語	本文の各語にあり	×	部分的に注記
文法、語法	訳順を示す訓点	一部に注記あり	注記
訳文	一部に掲載あり	全文訓み下し文	こなれた日本語訳

(4) 独案内・直訳から講義へ至る過程で訳語がこなれた日本語へと変わっていく。その具体的な変化を端的に表したものが、関係代名詞であり、独案内では 2 回にわたり訳順の数字が付されている。漢文で言うところの「再読文字」に相当する。以下の表は、年代とともに再読が減っていく状況を表している。

表 2 パーレー万国史独習書 (関係代名詞の再読の比較)

発行年	1~14 章		15~37 章	
	再読あり	再読なし	再読あり	再読なし
M17	23	0	54	2
M19	12	11	/	
M20	3	20		

(論文①より)

表 3 ナショナルリーダー独習書 (関係代名詞の再読比較)

発行年	関係代名詞
M20 (直訳)	再読あり
M34 (意識)	再読なし (「トコロノ」なし)
M43 (講義)	再読なし (「トコロノ」なし)

(他の再読比較)

発行年	使役動詞	疑問詞	接続詞
M20	再読あり	再読あり	再読あり
M34	再読なし	再読なし	再読なし
M43	再読なし	再読なし	再読なし

(発表③より)

表 4 英文典独習書 (関係代名詞の再読比較)

The horse that I rode (ピネオ)

発行年	the を除く訳順 (再読語数)
M3	1/6, 2/5, 3, 4 (2 語)
M5	1/6, 2/5, 3, 4 (2 語)
M16	1/6, 2/5, 3, 4 (2 語)
M19	5, 1/4, 2, 3 (1 語)
M20	5, 1/4, 2, 3 (1 語)

Give some names that have the same form in both numbers. (カッケンボス)

発行年	the を除く訳順 (再読語数)
M3	12, 1, 2/11, 3/10, 9, 7, 8, 6, 4, 5 (2 語)
M4	13, 1/11, 2/12, 3/10, 9, 7, 8, 6, 4, 5 (3 語)
M18	13, 1/11, 2/12, 3/10, 9, 7, 8, 6, 4, 5 (3 語)
M20	10, 8, 9, 7, 6, 4, 5, 3, 1, 2 (0 語)

(発表①より)

(5) 講義が現れるのは明治 30 年頃であるが、独案内・直訳の発行がピークを迎える明治 20 年頃から再読の減少傾向が見られることが、具体的なデータとして示されている。

(6) 以上見てきたように、明治期の前半と後半では、訳読のあり方に大きな変化が見られる。明治期の訳読全てが「古き悪しきもの」ではなく、その時代にすでに、より良い学びを求めた動きがあったことを認識する必要がある。独習書分析からこの点が明らかにされたことは、日本の英語教育史の全体像を解明する上で重要であると考えられる。

(7) 今後の課題は、本課題研究を通じて蓄積されたデータベースを質・量ともにさらに充実させ、さらなる分析を進めることである。個々の事例についてより緻密なデータを集めることができれば、訳読法の転換のありようをより明確に説明することができるであろう。

(8) 期間内に学会発表を行った内容は、順次論文化する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①馬本 勉『『パーレー万国史』独習書に関する研究』『英語と英文学と：田村道美先生退職記念論文集』(田村道美先生退職記念事業会) pp. 53-62. 2014年(査読無)

[学会発表] (計7件)

①馬本 勉「明治期英文典独習書の分析研究」日本英語教育史学会第31回全国大会(久留米工業高等専門学校・福岡県久留米市)2015年5月16日

②馬本 勉「独習書の分析を通じた訳読の変遷に関する研究」日本英学史学会第51回全国大会(福井大学・福井県福井市)2014年10月19日

③馬本 勉「関係代名詞の訳出法：その変遷をめぐって」日本英語教育史学会第249回研究例会(サテライトキャンパスひろしま・広島県広島市)2014年9月21日

④馬本 勉「明治期独習書データベースの作成と活用について」日本英語教育史学会第30回全国大会(拓殖大学・東京都文京区)2014年5月18日

⑤馬本 勉「英学独習書に見る英語学習の諸相」日本英学史学会第50回全国大会(慶応義塾大学・東京都港区)2013年9月29日

⑥馬本 勉「明治期英語独習書の研究：内容と類型について」日本英語教育史学会第29回全国大会(四天王寺大学・大阪府藤井寺市)2013年5月18日

⑦馬本 勉『『パーレー万国史』独習書に関する研究』日本英語教育史学会第241回研究例会(拓殖大学・東京都文京区)2013年1月13日

[その他]

ホームページ等

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/~umamoto/stb/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

馬本 勉 (UMAMOTO, Tsutomu)

県立広島大学・生命環境学部・教授

研究者番号：40213483